

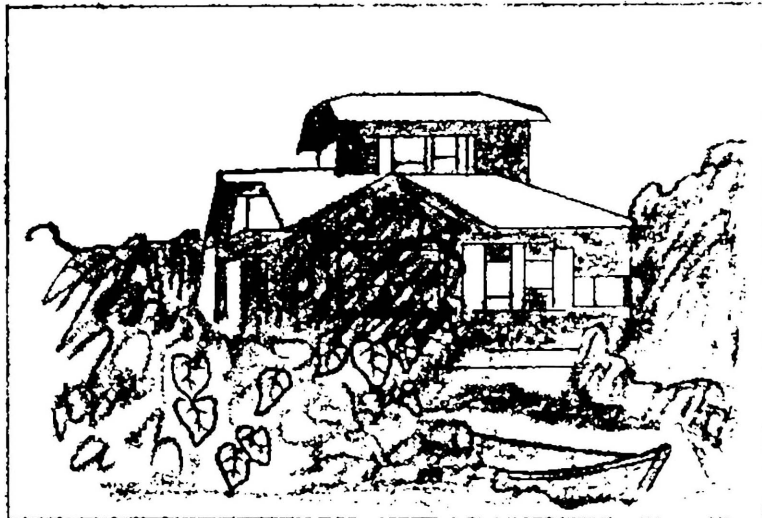
はまゆいと梅貝と

海光るわが故里



昭和五十九年十一月号
通巻第二十三号

鵺沼を語る会



神楽舎 「砂のいろ」より 斎堂様写

第十一番目の

江のしま道しるべ

伊藤節堂

元禄年間に杉山検校が建てたといわれる「江のしま道しるべ」は現在、藤沢市内に十基残っており、その所在と数は表のとおりであります。

ところがこのたび、市の文化財巡回パトロール員奥田直元氏の調査で、第十一番目の「江のしま道しるべ」のあることがわかりました。

新しく見つかったのは、鵜沼海岸七・一七 秋山嘩氏の庭園ですが、これで市内の

杉山検校が建てた道しるべは十一基となりました。

遊行通り三丁目ロータリー	一基
白旗神社	一
法照寺（鵜沼）	一
市役所構内	二
片瀬小学校正門前	一
密蔵寺筋向い	一
片瀬市民センター構内	一
西行戻り松	一
江の島福石わき	一
秋山嘩氏庭内	一

（詳細は昭和五八・三・一五「鵜沼」第三号を参照してください。）

（昭和五九・九・二三記）

鵜沼碑文集（その一八）

伊藤節堂

一名 称 松岡静雄先生庵趾の碑

二所 在 鵜沼海岸七一八一四

三建 立 昭和一二年五月三〇日

四碑 文

松岡静雄先生之庵趾

松岡静雄先生ハ明治十一年五月一日兵庫県神

郡田原村ニ生ル先考ハ操先妣ハたけ先生ハ

其七男ナリ幼ニシテ穎悟神童ノ名アリ長シテ

身ヲ海軍ニ投シ日露日独ノ兩戦ニ功アリ累進

シテ海軍大佐ニ至ル先生夙ニ国家経綸ノ大策

ヲ懷キ殊ニ南洋ノ開發ニ志シ大正七年予備役

ニ入り種々画策スル所アリシモ不幸病ヲ得テ

相州鵜沼ニ退ク爾（？）来俗塵ヲ避ケテ學術ノ研鑽

ニ努メ等身ノ大著ヲ成シテ学会ヲ驚倒セシム

昭和十二年五月三十日 知友門生有志建之

文学博士中村孝也撰 池田宙堂書

（昭和五九・一〇・三記）

神楽舎（ささらのや）大人

松岡静雄

年譜

伊藤節堂編

凡例

（略記）（氏名）―掲出順・敬称略―

碑文 松岡静雄先生庵趾碑」

略歴 松岡静雄略歴

池田 池田敏雄「近代畸人伝松岡静雄」

清野 清野謙次「南洋研究の先覚者松岡静雄大佐を偲ぶ」

喜久子 野口喜久子「湘南国語研究会について」他

磐木 松岡磐木「新篇日本古語辞典の再刊にあたって」

加賀屋 加賀屋幸利「神楽舎大人の思い出」

木村 木村新「神楽舎翁」

八巻 八巻藤吉「東伏見宮依仁親王のことなど」

雪子 松岡雪子「新篇日本古語辞典序文」

高木 高木和男「初めて会った印象」

李 李弘植「鵠沼の思い出」

1878	明治	11.5.1	兵庫県神崎郡田原村に生る、 父操、母たけの7男	(碑文)
1895	〃	28.12	海軍兵学校に入学(18才)	(略歴)
1897	〃	30	首席で卒業、候補生として遠洋航海に出る	(池田)
1899	〃	32.1	海軍少尉(22才)	(略歴)
1900	〃	33.1～9月	軍艦八雲廻航員としてドイツに派遣	(略歴)
1904	〃	37～38年	戦役に参加、軍艦千代田航海長 大尉(27～28才)	(略歴)
1906	〃	39.2	常備艦隊参謀	(略歴)
	〃	39.4	海軍兵学校教官	(略歴)
		39	子爵田尻稻次郎の次女愛子と結婚(29才)	(池田)
1907	〃	40	妻愛子病没	(池田)
1907	明治	40.12	海軍軍令部参謀	(略歴)
1909	〃	40	子爵野村靖の5女初子と再婚	(池田)
	〃	40.12	オーストリア大使館附海軍武官として渡欧 滞欧中に長女雪子生まれる	(略歴) (池田)
1913	大正	2.3	帰朝	(略歴・池田)
1914	〃		世界大戦勃発、日独戦争に従軍 軍艦筑波副長	(略歴)
	〃	3.10	日本海軍はカロリン群島ボナペ占領、松岡	
		3.7	はボナペに上陸、初代民政署長としてミク ロネシアを支配	(池田)
1915	〃	4.7	「椰子栽培法」を農商務省農務局から発行	(清野)

大正	〃	4	海軍軍令出仕、海軍省出仕、文庫主管、 日独戦史編集長	(略歴)
	〃	4.10	「送仮字法」海軍軍令部戦史編纂から発行	(清野)
1916	〃	5.2	海軍大佐 (39 才)	(略歴)
1917	〃	6.7	「南溟の秘密」春陽堂から発行	(清野)
	〃	6	海軍大佐で退役	(池田)
1918	〃	7.11	「和蘭語文典」(未定稿) 日蘭交通調査会 から発行	(清野)
		7.12.1	願に依り予備役編入、日蘭通交調査会理事 に就任、蘭語文法書著述	(略歴)
1919	〃	8	日蘭親交促進の目的を以て和蘭に赴く	(略歴)
	〃	8	蘭領印度の資源調査	(池田)
1920	〃	9	日蘭親交促進のため蘭領東印度に赴く 蘭国女王より『オランエ・ナッソウ 2 等 勲章』贈与さる	(略歴)
1921	〃	10.9	「蘭和辞典」を日蘭交通調査会から発行	(清野)
	〃	10	「和蘭語辞彙」編纂	(略歴)
1922	〃	11	慢性腎臓炎が次第に加重	(清野)
1923	〃	12	以来本式に文筆に親しむ	(清野)
1923 大正		12.9.1	母と子どもはさきに東京に帰る、父鵠沼に 残る、鵠沼の山口紋蔵さんの睡れを借りた、 二階屋の家は 2 秒とたたないうちにつぶれ たが、父は桑の木で作った軽いテーブルが 支えとなって九死に一生を得た、腰に打撲 傷を受けた。 相模湾に軍艦を停泊させ、東久邇宮家のお 供をして東京湾から帰る。	(略歴) (清野) (清野) (喜久子)
1924	〃	13	脳溢血で倒れる、鵠沼に隠遁	

		(四七才)	(池田)
	13.12	爪哇史 J を岩波書店から発行	(清野)
1925	14.3	「通俗文法講話」を国語書院から発行	(清野)
	14.9	「中間階級の研究」を聚英閣から発行	(清野)
	14.10	「太平洋民族誌」を岡書院から発行	(清野)
1926	15	「日本言語学」を刀江書院から発行	(清野)
	15.10	「チャモロ語の研究」を郷土研究社から発行	(清野)
	15.12	「日本古語大辞典」を刀江書院から発行	(清野)
昭和初年		日本古語大辞典の稿成る	(磐木)
1927	2	「播磨風土記物語」を刀江書院から発行	(清野)
	2.7	「ミクロネシア民族誌」を岡書院から発行	(清野)
1928	3.5	「民族学より見たる東歌と防人歌」を大岡山書店から	(清野)
	3.4	「常陸風土記物語」を刀江書院から発行	(清野)
	1.9	「中央カロリン語の研究」を郷土研究社から	
		発行	(清野)
1929	3.12	「日本国体本義」を日本国体本義編纂審議会	
		から発行	(清野)
	4.3	「日本古語大辞典」第 1 巻（語誌）を刀江書院から発行	(磐木)
	4.12	「日本古語大辞典」第 2 巻（訓話）を刀江書院から発行	(磐木)
	2.6	「マーシャル語の研究」を郷土研究社 から発行	(清野)
	4	私(木村)は晩年の弟子である、上 雪子、喜久子、かつみ、磐木(中学 1 年)、神楽舎門弟、窪田寿子、李弘 植、宮崎昇、矢島栄一、鈴木一男、小西四郎、木下 勇、加賀屋幸利、八巻藤吉、西川、一寸木幹愛新名 登、吉野秀雄、黒田、佐野、内田、小林、山内、扇谷正造 満州事変が起こったときはご機嫌が悪かった。この犠牲は君たちが払うことになるのだよといわれたが、そのとおりになった。	(木村)

1930	昭和	5.3	「パラウ語の研究」を郷土研究社から発行	(清野)
	〃	5.4	「中等学校に於ける国語研究並に教授法」を発行	(喜久子)
	〃	5.7	「歌学」を新興学会出版部から発行	(清野)
	〃	5.9	「紀記論究神代篇 1 創世記」を新興学会出版部から	(清野)
	〃	5.10	「ボナペ語の研究」を郷土研究社から発行	(清野)
1931	〃	6.4	「紀記論究神代篇 2 諾冊二尊」を同文館から発行	(清野)
	〃	6.5	「紀記論究神代篇 3 高天原」を同文館から発行	(清野)
	〃	6.6	「紀記論究神代篇 4 出雲伝説」を同文館から発行	(清野)
	〃	6.7	「紀記論究神代篇 5 国譲」を同文館から発行	(清野)
	〃	6.8	「紀記論究神代篇 6 高千穂時代」を同文館から発行	(清野)
	〃	6.8	「ヤップ語の研究」を郷土研究社から発行	(清野)
	〃	6.9	「紀記論究建国篇 1 神武天皇」を同文館から発行	(清野)
	〃	6.11	「紀記論究建国篇 2 大和欠史時代」を同文から発行	(清野)
	〃	6.12	「紀記論究建国篇 3 師木宮」を同文館から発行	(清野)
1932	〃	7.2	「紀記論究建国篇 4 日代官」を同文館から発行	(清野)
	〃	7.4	「紀記論究建国篇 5 国内統一」を	

		同文館から発行（清野）	（清野）
1932	昭和 7.6	「紀記論究建国篇 6 外藩帰伏」を同文館から発行	（清野）
	7.7	「伊予上代史考 伊曾乃神社」を郷土研究社から	
	〃	発行	（清野）
	7.9	「紀記論究外篇古代歌謡」（上）を同文館から	
	〃	発行	（磐木）
	7.11	「紀記論究外篇古代歌謡」（下）を同文館から	
	〃	発行	（磐木）
1933	8.9	「国語と民族思想」第 1 輯発行	（喜久子）
1934	9.2	「万葉集論究」第 1 輯を章華社から発行	（清野）
	〃 9.2	「国語と民族思想」第 2 輯発行	（喜久子）
	9.5	「国語と民族思想」第 3 輯（国語教育是正号）	
	〃	発行	（喜久子）
	9.6	「万葉集論究」第 2 輯を竜華社から発行	（清野）
	〃 9.9	「国語と民族思想」第 4 輯（上代思想研究号）を	
1935	〃	発行	（喜久子）
	10.1	「国語と民族思想」第 5 輯（文法研究号）を	
	〃	発行	（喜久子）
	10.1	「簡易文典」を発行、実費 1 部 24 銭	（喜久子）
	〃 10.3	「ミクロネシア語の総合研究」を岩波書店から	
	〃	発行	（清野）
	10.5.26	私が湘南中学校教諭のとき神楽舎講堂を訪い	
	〃	日露戦争の話をきいた。千代田艦長は東伏見宮	
		で航海長は先生であった。	（清野）
		その回顧談の最中先生は急にワーワーと大声で	（八巻）
		泣き落涙された。	
	10.6	「有田縁歌と防人歌」を瑞穂書院から発行	（清野）

昭和	10.10	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第1輯発行	(喜久子)
〃	10.11	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第2輯発行 (会費30銭であった)	(喜久子)
〃	10.11.21	湘南国語研究会の例会があった。	(雪子)
〃	10.12	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第3輯発行	(喜久子)
1936	〃 11.1	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第4輯発行	(喜久子)
〃	11.2.26	二・二六事件のとき鵜沼海岸駅から先生宅 まで訪問客つづく	(高木)
〃	11.3	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第5輯発行	(喜久子)
〃	11.4	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第6輯発行 (活字印刷となる)	(喜久子)
〃	11.5	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第7輯発行	(喜久子)
〃	11.5.9	病革る	(木村)
1936	〃 11.5.20	病室で写真を撮る	(喜久子)
昭和	11.5.23	午後0時55分 妻子門弟にかこまれてみまかる 算年五九歳	(木村) (池田)
〃	11.6	「国体明徴上の一考察」を時事新報社から発	(清野)
〃	11.6	「神楽吉講堂湘南国語研究会誌」第8輯発行 (黒わくのお知らせあり)	(喜久子)
1937	11.7	「神楽舎講堂湘南国語研究会誌」第9輯発行	(喜久子)
〃	11.7.11	湘南国語研究の追悼会記念撮影する	(喜久子)
〃	12.5.30	知人友人門下生有志により「松岡	

		静雄先生之庵趾」碑を建つ	(碑文)
1937	〃 12	新篇日本古語辞典」を刀江書院から発行	(磐木)
	〃 12.12	「増補日本古語大辞典」を刀江書院から発行	(磐木)
1938	〃 13.2	「神楽台黙語」を書物展望社から発行	(清野)
		「日本固有民族信仰」を刀江書院から発行	(清野)
1942	〃 17.5.23	水交社で松岡静雄氏の追悼座談会が催される 発起人 山梨勝之進、大将石黒忠篤 他、 追悼演説 中村孝也、柳田国男、永井威三郎	(清野)
1945	〃 20.12.6	長女 雪子 永眠	(喜久子)
1962	〃 37.2	妻 初子 永眠	(磐木)
	〃 37.3.1	妻 初子の葬儀	(李)
	〃 37.3	「新篇日本古語辞典」再刊	(磐木)

——完——

あ と が き

この年譜は 1975 年（昭和 50 年）3 月 1
法政大学出版局発行の野口喜久子編「砂のい
ろ」を文献として編集したものであります。

凡例の芳名は「砂のいろ」に寄稿された方
々であります。

(昭和五九・一〇・三 編者誌)

伊藤節堂 編

松岡氏略系

播磨赤松氏の後裔
兵庫県神東郡田原村辻川の住

松岡勘四 (安永六年没) — 倅、松之 (文化九年没六九才) — 左 仲 (医者)
(幼名儀)
(名医といわれた)

(医者)
(漢学者)
(賢婦人として藩表彰)
長女 小鶴 (明治6没67才) — 長男 操 (明治29没65才)
婿養子 至 (医者)
(号陶庵)
(事情あって離縁)
(明治7没66才)
妻 たけ (明治29没65才)
(長者尾柴利七の長女)
(記憶力は抜群であった)

医者中川氏

(医師・千葉県布佐に開業)
長男 鼎 (昭和9没) — 長女 文子
妻 — 二女 茂子
二男 俊治 (明治16没19才)
(医師・万葉学者・井上家に入り通泰と改名)
三男 泰蔵 (昭和16没76才) — 長女 桃枝
妻 龍子 (昭和16没)
四男 芳江 (夭折)
五男 友治 (明治7没)
(官吏・民族学者・柳田家に入る)
六男 国男 (昭和37没88才) — 長女 三千穂子
妻 孝 — 二女 枝正
— 三女 千津
— 四女 三千
(軍人・国語学者)
七男 静雄 (昭和11没59才) — 長女 雪子
妻 初子 (昭和39没) — 二女 喜久子
— 三女 かつみ
— 長男 磐木
(日本画家号映丘)
八男 輝夫 (昭和13没58才) — 長男 道春 男樹
妻 静野 — 二男 緑
— 長女 緑

略年譜		長男	松岡 鼎	三男		井上通泰	幼名泰蔵	六男		柳田国
明 11	明 12	明 14	明 19	明 20	明 24	明 26	明 35	明 33	明 34	明 34
神戸師範学校卒、小学校訓導、 家督相続	校長兼巡校視、結婚	医を志して上京	帝国大学医科卒業	茨城県布川町に開業、のち千葉 県布佐に移る	井上家へ養嗣子、通泰と改名	東京帝大医科卒業、大学助手 兼眼科開業	岡山医専眼科教授 麴町区内幸町に開業、 宮中顧問官、御歌所寄人、 貴族院議員	東京帝大法科卒、農商務省勤務	柳田直平の養嗣子	柳田直平の養嗣子

大 昭		八男	松岡映丘	本名輝夫	(文 献)		野口喜久子	村松梢風	筑摩書房	平 凡
大 3	昭 21	昭 22	明 37	大 40	大 7	昭 10	「砂のいろ」	「本朝画人伝」第七卷	「定本柳田国男集」別巻第五	社「世界大百科事典」
貴族院書記官長	枢密顧問官	民族学研究所設立、 芸術院会員、学士院会員	東京美術学校卒 母校助教授	教授	帝展審査員	国画院創立 代表作「室君」「右大臣実朝」				(昭和59・10・21)

芥川龍之介晩年の消息（補記）

富士山（たかし）

筆者は昭和五十八年七月鵠沼を語る会の第十五号に河童忌特集として、龍之介の晩年（大正十五年一月から昭和二年七月）の消息として、主として龍之介の健康状態の事を記し一応結末がついたものと思っていた。

ところが、大正十五年の年末から翌昭和二年年頭あたりの一週間ほどのところに誤りがあると葛巻左登子さんの注意あり、更に、近頃になって斉藤茂吉、土屋文明両氏が、大正十五年九月に龍之介の二階屋へ持参したのは、ハランでなくスルガランであったとの話に結末をつけたく、もう一度執筆補記することにした。

筆者が四、五年前に古本屋で入手した昭和二十年四月発行の芥川龍之介読本の末尾に、

吉田精一編の芥川龍之介年譜は、龍之介の業績のことはいろいろと書いてあるが龍之介の健康の方面については何の記載もなく、十五年に本人病氣静養のため、一家鵠沼にうつり住み、大晦日を借家の二階家ですごし、翌一月二日田端の義兄西川豊の家が全焼したとのしらせで、龍之介一家はいそぎ鵠沼を引きあげ、田端に帰ったとあるので、そのまま信じていた。

ところが、昨秋、葛巻左登子さんが拙宅に参られ、実は、大正十五年十二月二十八日に、文子叔母は子供三人をつれて、一まず先に田端に帰ることになり、龍之介に、貴方も早く田端へ帰って来て、一家そろって新年を迎えましょうと云うて家を出られた。

龍之介は左登子さんの兄義敏当時十七才と二人で残務を整理していたが、十二月三十一日鎌倉の小町園へ行き、大晦日と翌元旦の二晩を小町園ですごし、二日朝早くかえってきたので義敏は大変怒った。怒るのも尤もで、

田端の家から鵠沼海岸の有田肉屋を通じて、龍之介に早々に帰ってくるようにとの電話がしばしばかかり、電話口へ出た義敏は、龍之介の行動をありのままに言えないので、それをごまかすのに非常に苦労したわけであった。小町園から帰って来た龍之介はすぐ田端へ帰った。義敏は跡しまつに2、3日かかった由であった。

なお、小町園の女将は非常な美人で、多数の女中を使っていたが、龍之介の「或痴呆の一生」に出てくる月光の人とか、月光の女とかはすべてこの女将を指すのだと、左登子さん兄妹は信じておられるが、筆者の考えでは、月光の人とか、月光の女などとは容姿気品高く、かつ麗わしく、とても普通の男の手の届きそうもない女性という意味でなからうか、二晩もとめてくれる小町園の女将とは概念的にちがうと思う。この女将の亭主は非常な暴君で、女将をひどく虐待するので龍之介は深く同情していた。

筆者は大正十五年七月から三ヶ月間ばかり龍之介を診察した。龍之介はきちんと筆者の小院へ通院した。川端康成なども紹介され診察した。龍之介という方は、これまで他の医師からどんな治療をうけたなどは一切口にしない人であった。その時の龍之介診療の詳細はカルテ（診療記録）を基として、昭和十年十月号の文芸春秋にくわしくのせてある。二階家へ龍之介一家がうつてからは、一度も診察したことはなかった。然し筆者は龍之介の健康を非常に気にしていた。

十五年の秋、鵠沼の松林を散歩している龍之介に会ったが、なんだか以前より元気がわるいように思われた。それでも、昭和二年三月谷崎潤一郎と文学論争をしたり、五月には東北、北海道へ文学講演に出かけたりした。そうして数々の小品を書きあげ、精神力も体力もつきはてて七月二十四日に自殺した。誠にいたましい限りであった。

岩波書店は世間の要望に答えるため、急い

で芥川龍之介全集の出版を計画した。著作品は既に発表されているものを集めるので何でもないが、書簡集が大変なのである。書簡集はどうして作るかというと、例えば、龍之介が死亡すると、岩波の店員が龍之介の宅へやって来て、故人の友人名簿、友人からの手紙は勿論、年賀状、献本者の氏名など出来るだけ龍之介の交友関係を探り、これらの人々に、この度故人の全集を発行し、書簡集もつけたいから、龍之介から来た書簡類はすべて暫時貸して欲しい、という手紙を出す。

かくして集まった書簡を、年月日順に整理して、ここに書簡集は出来上る訳であるが、中には龍之介の手紙を大事にしてたんすの奥にしまい込み、貸してくれない人もあるという。昭和十五年頃、岩波の龍之介全集出来上がり、その書簡集を見ると、龍之介は大正十五年夏以後、筆者の治療をうけ乍ら斉藤茂吉から阿片を貰っていたことが判り、以後ずっと阿片を茂吉に請求し、茂吉もこれに応じていたこ

とが判った。このことは龍之介は筆者に一言も洩らさなかった。

書簡集を見ると、昭和二年三月になると龍之介茂吉間の文通が殆どなくなり、事情を知らぬ人には両者の交際がうすらいだかのように見えるが、田端に帰った龍之介は、今度は青山の茂吉の病院へ通い、直接に阿片を貰ってくるので、両者は手紙をやりとりする必要がなくなったのである。

岩波よりおかれて二十年、筑摩書房も龍之介全集を出した。岩波版の書簡は1642通、筑摩版のものは一四一九通である。これは筑摩版の編集方針は岩波版とは違い、龍之介が俳句とか漢詩などを、そのまま封筒に入れ友人に送ったものは書簡とはみず、別項目の方へ移すという方針をとったためと思われる。

昨年の本会の第十五号に「九月二十五日斉藤茂吉、土屋文明訪問、ハラン―鉢もつてくる（長寿を祈りて）」とあるのは、葛巻義敏が勘ちがいして、ハランを持って来たと話した

ことを筆者がそのままのせたからである。スルガランのことは両全集ともにのっていない。スルガランのゆくえについては、葛巻左登子さんが別紙にのべておられるから省略する。

大正十五年十二月二十五日滝井孝作宛の龍之介の手紙の末尾に、鵠沼イの四号龍之介とある。数ヶ月前に向うの二階家に移ったのに、イの四号とはおかしい。

それよりさき、大正十五年夏前のこと、まだ一度も筆者の診療をうけた事がないのに友人に、この度富士山という医師の診療をうけた、山はタカシと読む由、という手紙を出している。それから、大正十五年七月二十七日筆者が東家へ往診し、初めて龍之介を診察したのに、龍之介は再び富士さんの診療をうけたと友人にかいている。このようなことは龍之介に時々あったのではなからうか。なお前掲の滝井孝作宛の書簡は、龍之介が鵠沼から友人にあてた最後のものである。

つぎに斉藤茂吉全集にうつる。茂吉は龍之

介より五才、筆者よりは七才年上であり、昭和二十八年七十一才で死亡した。茂吉の書簡集に龍之介に阿片の連用は有害だとさとしたものは一通もない。つまり茂吉は龍之介に乞われるままに阿片をやっていたと察せられる。この行為は龍之介の自害の頃までつづいたのではなからうか。何となれば、阿片の味を覚えた者は中々やめられないものである。

突然に阿片をやめさせると、ひどい衝撃を与える。今流行の大麻の場合もそうである。すると茂吉はけしからん男ということになる。当時茂吉は、万葉集とくに柿本人麿の研究に夢中であり、神経衰弱だの、神経症だの、精神病などの診療には興味も余裕もなかったと思われる。

一般に書簡集というと、関係のない人には、全くつまらんと思われよう。去る九月の本会で筆者は、龍之介関係の出版物の目録を見て、余りにその内容の多いのにびっくりしたと申したが、その中には、岩波、筑摩の両全集は

別として、書簡集とでも名づけたいものは一冊もない。なお、今後も龍之介に関する書籍はふえる傾向である。然し、龍之介全集書簡の前年（大正十二、三年頃まで）のものは、文学的趣味の溢れる長いものが多い。

今回の龍之介晩年の消息（補記）は、このあたりで一応終りとしたしたい。

—終—

（昭和五十九年十月十日 記）

月光の女

富士 たかし 山

龍之介の晩年を書き終ると、青年時代の健康状態はどうだったか知りたくなる。吉田精一編の年譜には青年時代の作品ものっているが、健康には何一つふれていない。然し、一高、東大時代は健康でほかからで、友人とよく語る男らしかった。

龍之介は大正五年七月東大卒業、直ちに横須賀の海軍機関学校の英語教師に赴任した。鎌倉に下宿していたが、その頃は、龍之介は健康であり、生活も愉快であつたらしい。

大正七年二月塚本文子と結婚し、翌八年七月満三年つとめた機関学校を辞し、東京に転居した。大正八年には当時大流行のスペイン風にやられている。

筑摩書房版によると大正六年鎌倉、横須

賀から友人に宛てた書簡は二十九通、大正七年には五十一通、大正八年には十二通の多数にのぼっているが、何故か海軍機関学校在任中の感想等については一言もふれていないのはおかしい。

大正十一年、十二年頃から何か龍之介の頭を悩ますものあり、自然に睡眠もわるくなり、所謂神経衰弱となる。付近の医師の診療も効かないので、自ら薬局に出かけ、当時東大病院でもまだ使っていないドイツ舶来の睡眠薬を買い、服用しつづけた。こんなことは身体によい筈はない。

大正十二年九月一日の関東大地震については一言もふれていない。筑摩書房によれば、大正十四年四月十三日から五月二日まで伊豆の修善寺で静養し、同年八月二十五日から九月八日まで軽井沢で避暑静養したとある。

大正十五年一月十五日湯ヶ原の中西屋に静養に出かけるのであるが、そこからは、筆者の「龍之介の晩年の消息」が書きはじまるの

である。こんな数年間の苦悶の間でも龍之介は創作をつづけていた訳である。

さて、何が龍之介の頭をそんなに苦しめたのかそれはわからぬ。前編の消息にのべた龍之介の「或痴呆の一生」にしばしば出てくる月光の女とか、月光の中の人とかの女性のこととを、葛巻兄妹は、小町園の女将のこととしておられるが、筆者は、月光の人とは容姿気品ともに高くきれいであつて、とても普通の男性の手の届く女性とは考えられないと既に述べたが、その女性との間に何か人に云われない問題でもあり、それが龍之介を苦しめたのではなからうか、然し、これはあくまで筆者の余計な憶測であり真実はわからない。

— 終 —

(昭和五十九年十月十日記)

「 鵠 沼 」 昭和 5 9 年 1 1 月 号
通 卷 第 2 3 号

昭和 5 9 年 1 1 月 1 3 日 発行
編 集 鵠 沼 を 語 る 会

藤沢市鵠沼海岸 2 - 1 0 - 3 4
鵠 沼 公 民 館 内
電話 3 3 - 2 0 0 1 、 2 0 0 2